



OB 会だより

国臨協 OB 会関東信越支部

2022年5月1日
 発行責任者：木下忠雄
 編集責任者：大貫経一
 国臨協 OB 会事務局
 東茨城郡茨城町桜の郷 510-7
 TEL：029-357-0397



令和4年6月4日アルカディア市ヶ谷(私学会館)にて開催予定の記念総会・懇親会は、COVID-19(オミクロン変異・BA.2株)の状況を鑑み解約し**中止**と致しました。

創立40周年記念総会・講演会は中止となりましたが、せめて記念品だけでもと考え、先般、会員の皆様に送付致しました。末永くご活用して頂ければ幸いです。

木下忠雄

OB会だよりと共に、議案書を同封しました。昨年と同様に、**書面表決書(葉書)**に記入していただき**必ず返送**して下さい。

なお、昨年は、会員100名中40名から返送がありました。

すでに、ワクチン接種3回目を済ませた会員が多数いると思います。まずは、一安心ですが、高齢になりますと、抗体価のじゅうぶんな上昇が期待出来ませんので、健康管理をしていきましょう。

【長寿のお祝い】

今年の該当者(80歳・昭和17/1/1～12/31迄)は**同封の書面表決の葉書**に、氏名と誕生日を記入しご返送ください。後日、お祝いの粗品をお送り致します。



叙 勲

令和4年 春の叙勲

宮野 勝秋さん

元 東京医療センター

臨床検査技師長

瑞宝双光章を授与されました。

永年のご功績に敬意を表し
心からお祝い申し上げます。

新入会員の紹介

2022年3月31日付け退職者の内、下記の方々がOB会に入会しました。

(順不同・敬称略・前勤務先)

金子 司	高崎・医療セ	技師長
上條敏夫	精神・神経	技師長
岩崎康治	埼玉病院	技師長
林 亮	千葉医療セ	技師長
石井幸雄	成育医療	技師長
吉川英一	相模原病院	技師長

北海道・道東 冬の旅

(タンチョウの里)

元・国立国際医療センター 宮崎澄夫

令和になった年の瀬、中国では得体の知れない感染症（後のコロナウイルス）が報告され日本にも影響があるかもしれないとの情報がありました。当時、中国からの観光客で賑わっていた日本では政府もマスクも神経質になっており、その後の感染拡大でPCR検査の重要性が叫ばれテレビ、新聞やネットでは毎日掲載されるという事態になりました。特に初めての緊急事態宣言での安倍総理の会見ではPCR検査と臨床検査技師の名前が連呼され驚いた時期でもありました。そして現在も医療関係者、特に同じ職業でもある臨床検査技師の活躍も話題（PCR検査やワクチン接種等）になり、現役の皆様には毎日の業務のご苦労に心から感謝を申し上げたいと思います。

さて今回、木下会長から撮影旅行のエピソードなどの原稿依頼をいただき、冬の北海道（道東）のタンチョウについてご紹介したいと思います。少しの間お付き合い下さい。



3kgのカメラとレンズは手持ち撮影で腱鞘炎になりそう!!!／鶴居

「コー、カッカッ」 近づくにつれて大きくなる鳥の声、タンチョウの鳴き声です。広い農場の前には多くのカメラと巨大なレンズ、想像したとおりの光景でした。（コーは雄、カッカッは雌の求愛の鳴き声）

東京・立川から羽田空港、そしてたんちょう釧路空港に到着し、空港ラウンジで安堵の一服がとにかくうまい！ 定年後の初めての道東の旅の始まりです。

冬の北海道道東の寒さは想像したより冷たい。宿泊施設の車が飛行機の到着時間に合わせ出迎えて（現在は中止）くれました。



宿泊ホテル（冬の予約は10月から、1週間で満員御礼）／鶴居

翌朝7時過ぎにタンチョウの餌場に向け歩き始めましたが、さらに内陸部の早朝の空気は顔がこわばり冷たく痛い、観察施設の受付の方の話では今週の平均温度はマイナス24℃、まさしく冷凍庫でした。



ほとんどが外国人、日本語が通じない（オーストラリア、アメリカ、中国など）／鶴居

北海道の冬の写真撮影、開始！

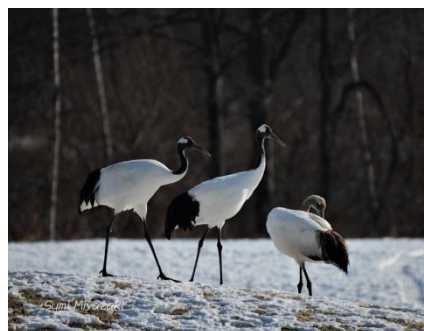
運動場の10倍以上の農場は銀世界、7時過ぎから4～10羽のタンチョウが適当な間隔で飛来してきます。その見事な美しさは純白の大きな羽の気品ある絵姿です。



グライダーのような静かな美しい着地と
着地後の求愛のダンスは見事なまでの感動
を見せてくれます。



ツガイの鳴き比べ
／阿寒



幼鳥とともに／
阿寒

40歳から始めた写真撮影はどちらかと言え
ば、新潟、山梨、長野への単身赴任だった頃
の副産物、赴任地で時間を持て余した苦肉の
対策とでも言うのでしょうか、転勤が多かっ
たため何か継続できる趣味を持ちたいから
でした。



タンチョウに
遠慮しながら
餌探しの白鳥
の家族／阿寒



ニホンジカより
少し大きいエゾ
ジカ／阿寒



雪の下の牧草を
穿るエゾジカ／
阿寒

(撮影地：北海道釧路市阿寒および鶴居村)

続いてタンチョウについて詳しい説明と生息の歴史をお話したいと思います。

タンチョウ（丹頂）はアイヌ語でサルロンカムイ『湿原の神』という意味だそうです。ツルは日本以外に中国、ロシア、朝鮮半島などにも生息し世界では15種、日本では7種でタンチョウは北海道にのみ生息していますが、他は鹿児島県のナベツルやマナツルが有名です。北海道では主に道東、特に釧路湿原が有名な生息地で釧路市阿寒や鶴居村にタンチョウのための特別な施設もあり、コロナ以前は大勢の観光客で賑わっておりました。タンチョウ「丹頂」の名称の由来は「丹」は赤、「頂」は頭頂、頭頂が赤いためこの名前がついたと言われております。頭頂には羽根がなく、ニワトリの赤いトサカ様で特に興奮した場合は真っ赤になるようです。背丈は1.2m前後、羽根を広げると約2.5m、体重4～10kg、人間の子供くらいの大きさです。生息地は主に湿原、河川、湖沼、食べ物は雑食でコイ、ドジョウ、カニ、エビ、タニシなど、3月の終わりには湿原で卵を産み、雄雌が交代で温め約一か月後にふ化します。ヒナは両親と一緒に湿原の中の餌を食べて成長し8～9月頃には飛べるようになります。

明治以前のタンチョウは北海道以外に関東地方でも見られたようです。しかし明治時代になると北海道でもその美しさから飼育用として乱獲され、さらに生息地である湿原は農地開発により激減し餌不足のため絶滅したと思われていました。その後、大正後期に釧路周辺で十数羽の生存が確認され1935年（昭和10）年に地元の関係者の強い要望により釧路湿原の繁殖地が天然記念物に指定され、戦後は阿寒町（現在は釧路市の一部）や鶴居村で地元の人たちによる給餌活動（北海道庁よりタンチョウ給餌人委嘱制度）も本格化し、1952年（昭和27）にはタンチョウが特別天然記念物となりました。その後、釧路湿原は1980年（昭和55年）ラムサール条約により世界的な湿原に登録

されました。現在の生息数はおよそ2000羽以上と考えられていますが、北海道東部の生息地である湿原は森林の伐採や土地、道路開発などによる湧水の不足から厳しい冬には凍結し、食料となる淡水の魚介類が極端に不足します。また、道路網の発達により自動車や電柱電線に衝突する事故も増えました。そのためこの地方では電線や電柱に接触することを少なくするため電線には黄色いカバーが巻かれております。私がタンチョウを数年前から撮影して感じたことは美しい姿とは裏腹に、警戒心が強く気性の激しい鳥だと感じました。ファミリー、特に子に対しての愛情はとても強い反面、外敵のキタキツネやタンチョウ同志でも縄張り意識が強く、羽を最大限に広げ鋭い口ばしで攻撃する場面をよく目にします。しかしタンチョウの餌場（農場）には時として冬場の食料不足からエゾシカや白鳥なども訪れ、仲良く撒かれたトウモロコシを啄む様子も見られます。



夕暮れの帰巢
（ねぐらへ）／
鶴居

そして夕暮れになると周辺の小川（ねぐら）へと飛び立ち、外敵から身を守るため川の中心部分に50～200羽の集団で過します。タンチョウにとっては外気温より川の水温が高いため幾分過ごしやすいのかもしれません。そして翌朝、朝日とともに個々のファミリーで数十か所の給餌場へ向かいます。



早朝のねぐら
（雪裡川）／
鶴居

以上、タンチョウについて簡単に説明いたしましたが、特に餌の少ない冬の北海道においては生死をかけた野生動物の日常があります。そして撮影では彼らの生活を尊重し、静かに見守りながら行動することを心がけております。いずれウイルス感染が終息し、タンチョウの里にも再び多くの観光客が訪れることでしょう。その時、人と野生動物の共存の地であることを再認識し彼らが安心して暮らせるようお願いしたいものです。現在、筆者はコロナウイルスの影響で撮影休命中ですが、彼らとの再会を楽しみに日々筋トレに励んでおります。

最後に投稿の機会を与えていただきました木下会長ならびに役員の皆様、編集・印刷で大変お世話になりました大貫事務局長に心より感謝申し上げます。(おわり)

(参考および引用文献)

- 阿寒国際ツルセンター・グルス
(釧路市阿寒)
- 鶴居・伊藤サンクチュアリ
(北海道鶴居村)
- 日本野鳥の会
(タンチョウ保護の取り組み)
- Wikipedia(タンチョウ／釧路湿原)
- その他の文献



感動の北海道秘境探訪4日間

(知床半島 野付半島)

元・東京医療センター 宮野勝秋

6/08 羽田空港(発 15:00)

<ANA743 便> 釧路空港 (着 16:35)



ようこそ
北海道へ

釧路湿原(ラムサール条約に登録された日本最大の大湿原)～釧路「釧路プリンスホテル」(泊)夕食は「はたご家郷土料理」

6/09 釧路「釧路プリンスホテル」～岬と花の霧街道(車窓)～霧多布湿原(北海道の野生動物の大半が生息する湿原、)～納沙布岬(日本最東端・望郷の岬公園・北方館・平和の塔)～風蓮湖・春国岱遠望～尾岱沼く野付湾遊覧船・アザラシ群生地遠望>野付半島・トドワラ(絶滅寸前、トドマツが風化して立ち枯れた、まさに秘境の風景)～知床ウトロ温泉「知床プリンスホテル」 風なみ季」(泊)

トドワラの枯木群

トドワラは、長い時間がかかって作りあげられた砂嘴(さし)の上に成立したトドマツ林が、海水面の上昇あるいは砂嘴の沈降により海水におかされ枯木群に変化したものと考えられています。枯木の大部分は樹齢90～120年のトドマツであり、その中に樹齢150～170年のエゾマツも混在していたことがその年輪から読みとれます。また、年輪幅(5～10mm)からこの林は極めてよい成長をつづけていたことが分かります。今後、枯木群の腐朽が進み塩湿地植物群落に置き換えられつつあるのも自然の生み出す大きな流れなのでしょう。

<北海道>



6/10 知床ウトロ温泉「知床プリンスホテル」風なみ季」～プユニ岬(知床の美しい海岸美)～知床峠(目の前に雄大な羅臼岳・感動の大パノラマ)～ウトロ港く船～知床遊覧船・知床岬航路(陸から行くことのできない知床岬を海の上からの眺望。途中カムイワッカの滝やフレペの滝など)～ウトロ港～知床五湖～フレペの滝(知床を代表する大絶景)～屈斜路湖畔温泉(屈斜路湖プリンスホテル・夕食は緑と池を眺めるガラス張りのレストランのbuffestailディナー)(泊)



2007.6.9 ホテルからの夕陽(知床ウトロ温泉「知床プリンスホテル」)



2007.6.10 知床峠



2007.6.10 おーろら2号船上より(知床連山)

6/11 屈斜路湖畔温泉(屈斜路湖プリンスホテル)～さくらの滝(サクラマスが滝を勇敢に登る様)～神の子池(時の移ろいにより色が変化する神秘的な池)～裏摩周展望台(通常のコースでは見られない裏側から摩周湖を眺め)～中標津空港(発 13:45)＜ANA840 便＞～羽田空港(着 15:30)

編集後記

久しぶりに外出した時の喫茶店で

コロナ禍の日本は、外出時、社会生活での場、勤務先等で、マスクの着用がほぼ徹底されています。感染予防には、絶大な効果があるようです。

蔓延防止が解除になり、数年ぶりに町に出かけ、ソーシャルディスタンスが整った喫茶店に入りました。

若い女性達の会話が、自然と耳に入ってきました。

「私、マスク美人で通っていてマスクを外すのが怖いので・・・」

「私は、一日の内ほとんど外さないわ。寝てる時も着けてるの。」

「私は、いろいろな素材と色のマスクを持ってるわ。デートする時は勝負マスクを着けるの。」

「ディスポのマスクだと、毎回新しいものに換えなくてはならないから、オムツみたいでや～よねえ。だから、洗えるものにしてるわ。清潔第一よねえ。」

これらの会話を聞いて、

若い女性の間で、マスクと言わないで、『顔パンツ』と言っていることが納得出来ました。

その後、耳直しに近くのオモウマイ店に行くことにしました。

